

第3回多職種のための投稿論文書き方セミナー

科学的な根拠を活かすグループインタビュー法

安 梅 勅 江 (筑波大学医学医療系)

グループインタビュー法は、グループダイナミクスを活かし、当事者のなまの声を科学的な根拠とする研究方法である。複数の参加メンバーのかかわりにより生まれる情報を、系統的に整理する。なまの声そのままの情報を活かすことができ、量的な調査では得られない深みのある情報と、単独インタビューでは得られない積み上げられた情報、幅広い情報、ダイナミックな情報を得ることが可能となる。また何よりも、新しいアイデアの創出と蓄積に威力を発揮する。

アンケート調査などの量的な研究方法と、グループインタビューなどの質的な研究方法を一緒に行い、多側面から状況をとらえることで、より精度の高い、ニーズに合致した情報の把握が可能となる。

しかし一方で、科学的な根拠としてグループインタビュー成果を活用するためには、妥当性、信頼性を担保するための精度の高い研究デザインが必須である。

本稿では、科学論文としてグループインタビューの根拠を活かすコツを概説する。詳細は参考資料を参照いただければ幸いである。

I. グループインタビュー法の特徴

グループインタビュー法は、クルト・レヴィンの場の理論をもとに開発された。その特徴として、特に下記3点が大きな強みである。

1) グループダイナミクスを活用することで、調査者と当事者の1対1の面接では得られにくい力動的な当事者間のやり取りから、より自然体に近い方法で醸し出された情報を把握できる。個人のもの見方がグループダイナミクスにより引き出されていく様子や、他者とのやり取りという日常的なかかわりの中から、より現実の状態に近い形で意義深い情報を

得ることができる。

- 2) トライアングレーション (triangulation, 方法的複眼: 複数の研究方法などを組み合わせて確からしさをより高めること) が容易である。設定したテーマや仮説に基づき、質問紙法などの量的な研究方法と質的研究法であるグループインタビュー法を両輪として組み合わせて実施し、研究の妥当性と信頼性をさらに向上させることができる。また個別面接法など別の質的研究法と組み合わせることで、グループダイナミクスにより引き出される新たな情報の意味付けと有効活用ができる。
- 3) 当事者および調査者のエンパワメントにつながる。グループインタビューに参加することで、当事者は自己表現し意見交換する場をほかの参加メンバーと共有することになる。そこでは共感が起こったり、新たな刺激が得られたり、つながりが生まれたりすることが多く、継続的なエンパワメントをもたらす可能性がある。

グループインタビュー法とほかの方法を比較してみると、下記のようなメリットがある。

1. アンケート法と比較したメリット

- (1) 調査期間が短期で済む。
- (2) 調査費用が安価で済む。
- (3) 研究者が直接対象者とかわる。
- (4) 非言語的反応を観察による把握が可能である。
- (5) メンバーの意見の積み上げが可能である。

2. 個別面接法と比較したメリット

- (1) グループとして意見を構築できる。
- (2) 相互作用による意見の引き出しができる。



図 グループインタビューの活用¹⁾

- (3) 相互刺激がある。
- (4) 三人寄れば文殊の知恵。
- (5) プレッシャーが少ない。
- (6) 自発的な発言を引き出す。
- (7) 専門性が高い。
- (8) 科学性が高い（密室性低）。
- (9) 構造的である。
- (10) 早い。

一方で、グループインタビュー法の限界性もある。たとえば次のようなものである。

- (1) サンプル・バイアスが生じやすい。→選択の段階で工夫が可能。
- (2) 他者の意見に引きずられる。→インタビュアーの面接技術で予防が可能。
- (3) 実施主体側に意見に対する対応の責任性が高い。
- (4) 分析困難もあり得る。
- (5) インタビュアー等の与えるバイアス。

しかしこれらは、サンプル抽出の工夫やインタビュアーのトレーニングなどにより、予防が可能である。グループインタビュー法を用いて科学論文を執筆する際には、方法論的な特徴、メリットとデメリットを理解し、成果の一般化可能性と限界性、デメリットを回避する工夫などを考察に明示する必要がある。

II. グループインタビュー法に適したテーマ

グループインタビュー法は、グループダイナミクスの利用により、より効果的に情報を把握できる研究

テーマや実践課題への活用が適している。たとえば、下記のようなテーマが有効である（図）。

- (1) 関係者の「なまの声」を体系的に整理する。
- (2) 関心テーマの背景にある潜在的・顕在的な情報を把握する。
- (3) 質的なアプローチを用いて、さらなる研究のための仮説を立てる。
- (4) 新しい考え方や概念、やり方や解決の方法を創造する。
- (5) 新しいプログラム、サービスなどの基本的な課題を明らかにする。
- (6) 関心のあるプログラム、サービス、機関などについて、関係者の印象を明らかにする。
- (7) 関係者がどのようなニーズ・意見を持っているかを明らかにする。
- (8) 質的または量的な研究に必要な質問項目や調査項目を引き出す。
- (9) 質的または量的な研究に用いた項目の適切性、妥当性について明らかにする。
- (10) 既存のプログラムを評価する、など。

III. グループインタビューの実施方法

グループインタビューは、グループダイナミクスが生じやすいよう、次のような環境設定で実施することが多い。

- (1) 司会者:インタビュアー1名(サブインタビュアー1名)
- (2) 記録者:筆記記録, 観察担当者各1名(録音担当, 映像担当者各1名)

- (3) インタビュー対象者：通常6～12名
- (4) 所用時間：1時間半～2時間半
- (5) 場所要件：静かな個室，録音映像記録設備

IV. 対象者の選定

グループインタビュー法の対象者は，1グループ数人であり，たとえ複数のグループインタビュー法を実施したとしても，大きな数の対象メンバーの情報を集めるわけではない。情報源が限られているため，メンバーに選んだ対象自体の影響を大きく受けるのが実態である。したがって，いかにテーマや仮説の検証に適合した対象メンバーを選択するかが，精度の高い結果を得る大きなカギになる。

しかし，グループインタビュー法における代表性とは，量的な研究法における，いわゆるランダム・サンプリングによる偏りがないという意味での代表性の意味合いとはまったく違うものである。

少なくとも，対象として選んだメンバーが，関連したテーマに関する対象者全体（母集団）の中でどのような位置にあるのか，他者の納得できる形で明確に説明できることが必須条件である。そのうえで，メンバーの選出の段階では，より奥深い，幅の広い情報を得るために，メンバーの構成や背景要因の組み合わせを工夫する。

グループインタビューにおけるサンプリングは，量的研究のような「母集団の代表性」を意図した無作為抽出ではなく，いかに意味深く広い質的な情報を得られるかという「質的内容の代表性」に基づき行われることが多い。事例の代表性ではなく，実証データから浮かび上がってくる理論や方法の質的内容に関する具体的な基準に沿って選択する。

複数のグループインタビューを実施するなどにより，多種のサンプリング法を組み合わせ活用することも可能である。

V. インタビューガイドの作成

インタビューガイドとは，インタビューに先立ち準備する目的，対象，質問内容など実施概要を記載した資料のことである。

インタビューガイドは，質問項目に「回答および分析しやすい項目を導入」するよう配慮する。回答および分析しやすい項目とは，理念や概念，抽象的になりやすい考え方やイメージを尋ねるのではなく，より具

体的な体験に基づき，日常生活の中で実際に触れることのできる内容を問う項目である。

参加メンバーから得られる言語的，非言語的情報は，体験に根ざした思いや生きた言葉であることで，より各々の情報の関係性が明確になりやすい。したがって，インタビューガイドは，グループダイナミクスがいきいきと湧き上がるような具体的な項目の設定を工夫するとよい。

実際にグループインタビューを実施する前に，インタビューの方法を決めると同時に，「どんな形で分析するか」，すなわち分析方法について，分析担当者間で討論しておく。

たとえば，「ヤマ」をどこにもっていくか，あるテーマについてはどのような背景のメンバーに重点的にアプローチするか，などはインタビューの方法と連動した形でおおよそその方法を決めておくと，分析の際に整理しやすくなる。

複数のグループに実施することが望ましい。複数のグループのインタビュー結果の複合的な分析は，単独のグループインタビューでは得られない，背景要因の比較検討や検証を可能にする。また妥当性と信頼性を高め，より説得力のある科学的な根拠とするためにも有効である。

複数のグループを設定する場合には，掘り下げたい内容について，違った立場，あるいは多角的な視点から内容の分析ができるように配慮する。たとえば，サービスに関するニーズの質的な把握という場合には，①さまざまな背景特性をもつサービスの利用者の視点，②そのサービスを提供している提供者の視点，③多くの利用者の状況を熟知している中間ユーザー（専門職）の視点など，同じサービスについても違った視点からの内容が得られるグループを設定するとよい。

VI. グループインタビュー法における妥当性と信頼性

妥当性とは，命題（事実の性質）が真に限りなく近似することである。内的妥当性は2つの変数の関係性についての命題が限りなく真に近いこと，外的妥当性は母集団同士の因果関係に関する命題の普遍性を意味する。

グループインタビュー法における内的妥当性の攪乱要因としては，次のものがある。

- (1) 個別背景の影響

- (2) 相互作用によるメンバーの変化
- (3) グループメンバーの偏り
- (4) ドロップアウトの問題
- (5) インタビュアーの影響
- (6) インタビュアー自身の変化

これらをあらかじめ予防するために、内的妥当性については記録の充実により攪乱要因への感度を高める、外的妥当性についてはほかの母集団に対する一般化を確認することが重要である。

質的研究は、当事者や実践の生々しい現実結び付いた情報を、実証的な手段を用いて紡ぎ出していく方法である。したがって、質的研究における妥当性と信頼性を別の言葉で言い換えるとすれば、「妥当性」はいかにその結果が「証拠」として使えるかであり、「信頼性」はその結果がいかに「確実」であるか、再現性があるかであるといえよう。

数字で明確に提示できる量的研究における妥当性や信頼性とは一線を画するものの、「証拠性」と「確実性」は「現実を活かす情報」の妥当性と信頼性として有効である。

質的研究の妥当性と信頼性を実証するためには、「記述的な方法」を用いて「証拠性」と「確実性」を論じる必要がある。たとえば、①明らかにしたいテーマや対象の特性に適合した方法が選択されているか、②結果は実証的なデータに基づいているか、③現実の実践の場や当事者にとって関連の深い結果が得られているか、④用いた方法の可能性と限界について十分に考察されているか、などを明快に述べる。量的調査のように、ある一定の計算方式により数値として確定できない点を踏まえ、複数の側面から何重にも包み込むよう重層的に、裏づけ情報を記述することが有効である。

また、グループインタビューの信頼性は、結果を実践の場面において活用し、その結果が類似した状況や、相違する問題に対しても応用できるかどうかにより検証することができる。

たとえば、得られた結果を類似した状況や相違した状況に適用してどの程度実現性があるか、その幅を評価するのも一法である。

グループインタビュー法を用いた論文が普遍的な根拠であることを示すには、解釈のゆがみや一般化を妨げる要素について戦略的に排除し、客観的な視点から明確に記述する必要がある。

VII. 科学論文としての評価基準

科学論文として査読に耐える基準を満たした論文を書くためには、質的研究の評価基準（瀬島，2003を一部改変）に基づき、下記の9点が求められる。

〔デザイン〕

1) 質的研究を用いた理由を説明しているか

当事者や実践のなまの情報を活用するために用いるのが質的研究法である。設定したテーマを明らかにしたり、仮説を検証するためには、質的な方法を用いることがなぜ有効なのかを明示する。

2) 適切な質的方法を選択しているか

質的な研究法の中で、なぜ特にグループインタビュー法を採用したのかを説明する。グループダイナミクスによる自然体に近い形での情報の収集、意見交換による新しいアイデアの創出など、グループインタビュー法の強みについて既存研究を引用しながら記述するとよい。

3) 倫理的配慮をしているか

メンバーが主体的な意志により参加を受諾している点、プライバシーやデータ管理上の倫理的な配慮について明記する。所属機関などの倫理審査委員会の承認を受けている場合は、その旨を記載する。

〔サンプリング〕

4) 対象者の特性を明示しているか

質的な研究法の妥当性と信頼性を高めるために、どのような対象者をどのように選択したか、サンプリングの方法を明示することはきわめて重要である。テーマや仮説の検証にもっともふさわしい対象として、具体的にどのような特性をもつ対象者を選択したのかを明示する。

5) 対象者の選択過程を明示しているか

上記の対象者を、どのような手段を用いて募集したのかを明記する。対象者の特性と募集手段を具体的に示すことで、結果にどのような特性が反映される可能性のある対象者であるかを読者が判断する基準を与えることができる。

〔調査・分析〕

6) 具体的なプロセスを記述しているか

グループインタビュー法は、調査分析の一連のプロ

セスについて、ある程度標準化された形が存在する。実施と分析の具体的な方法を明示する。たとえば、実施はインタビュアー1名、観察者1名、ビデオ録画し、質問内容はこの3点、グループダイナミクスを用いた討論を行ったなど。また分析は、完全な逐語記録と観察記録の作成からテーマや仮説を参照して重要なキーワードを抽出する「重要アイテムの抽出」、重要アイテムを理論に沿って類型化する「重要カテゴリーの整理」を行った、など。

7) 妥当性と信頼性を確保する努力をしているか

妥当性と信頼性を確保するために、グループインタビューの実施や分析の際にどのように配慮したかを具体的に記載する。妥当性の低下に影響する要因について、どのように排除したか、一つひとつ考察で述べる。

8) データと解釈の区別は明確か

データ部分は「結果」、解釈部分は「考察」に明確に区別して記載する。

9) 結論の導き方は明快か

設定したテーマや仮説を検証するためのグループインタビューの筋道を明記し、結論に至る妥当性や信頼性を読者がわかりやすいよう明快到説明する。

なお、論文ではなく報告書の場合には、これほど厳密である必要はない。これに準じた形で作成し、適宜妥当性を担保するための努力について言及することで、より「説得力のある根拠」としての活用が可能となる。

VIII. グループインタビュー活用に向けて

論文や報告書作成にグループインタビュー法を活用する場合には、グループダイナミクスにより引き出される個々のメンバーの「創造性」や「構想力」を利用できる点が大きな強みとなる。グループインタビュー法は、単なる静的な情報把握にとどまらず、グループダイナミクスという「強烈な個性のぶつかり合い」から動的な情報を生み出す手法である。

「当事者主体の理論構築」が保健領域で求められる時代を迎え、アンケートなど量的研究法を用いた「平均型」の情報把握に加えて、グループインタビューなど質的研究法を用いた当事者による「創出型」の情報把握の方法を、複合的に採用することの意義はきわめて大きい。

エンパワメントを意図した取り組みをはじめ、グループインタビュー法を用いた研究成果の積極的な発信が大いに期待される。

参考資料

- 安梅勅江. ヒューマンサービスにおけるグループインタビュー法. 医歯薬出版, 2001.
- 安梅勅江. ヒューマンサービスにおけるグループインタビュー法Ⅱ 活用事例編. 医歯薬出版, 2003.
- 安梅勅江. ヒューマンサービスにおけるグループインタビュー法Ⅲ 論文作成編. 医歯薬出版, 2010.
- 瀬島克之, 佐々木 健. 厳密なプロセスにもとづいた質的研究を行うための提言 方法論の概念整理と研究のデザイン・評価. 日本公衆衛生雑誌 2003; 50 (6): 480-484.